

飼育下チンパンジーの吐き戻し抑制に効果的な対策の検討 ～サトウキビの導入～

藤森唯 前田典彦 林美里（京都大学霊長類研究所）

目的

飼育下のチンパンジーの異常行動のひとつに『吐き戻し』が挙げられる

一度食べたものを吐き出し、再度食べる異常行動。採食時間の短さが原因のひとつとされている。



体を曲げて、食べたものを吐き出すアコム。

霊長研にも吐き戻しがひどい個体が...

対策のひとつに『サトウキビ』

しがんで食べるため、比較的長い時間を採食に費やせる



サトウキビ

サトウキビを食べるアコム

しがみ終わったワッジ

霊長研の個体においてもサトウキビによる吐き戻し抑制効果が得られるかを検討する。

結論

サトウキビ導入により採食時間の大幅な延長が見られた個体も多かったが、アコムにおいては採食時間の延長および吐き戻しの改善は見られなかった。これには採食の未熟さや、他個体との個体間関係が影響している可能性がある。

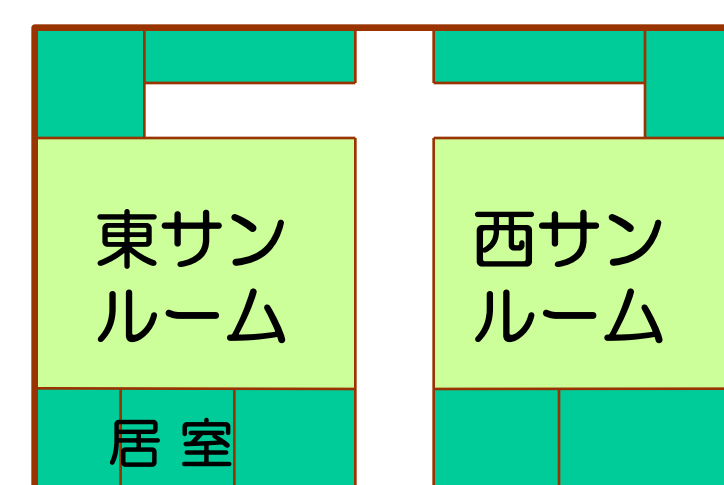
方法

● 被験体 ●

アキラ群7個体（♂2、♀5）
特に吐き戻しがひどいアコム（♂、13歳）を主な対象とし、他の6個体を対照群とした。

● 場所 ●

京都大学霊長類研究所のチンパンジー居室およびサンルーム。



西サンルーム1階からの様子

● サトウキビ ●

沖縄産サトウキビを1回に各個体80～100g与えた。

観察1 サトウキビ導入前後で、アコムの吐き戻し頻度に差は出るか？ （調査期間：2013年9月27日～10月17日）

アコムを対象に、昼食最後の食べ物（導入前:リンゴ、導入後:サトウキビ）を手にした瞬間から1時間の観察をおこない、吐き戻しを始めた時間と終了した時間を随時記録した。

観察2 7個体のチンパンジーたちはどのくらいの時間をかけてサトウキビを食べているのか？ （調査日：2013年10月17日、10月21日）

昼食の最後に各個体にサトウキビ（80～100g）を与えた。各個体、手にした瞬間から1時間、2分毎の瞬間サンプリング法によりサトウキビを食べているか食べていないかを記録した。

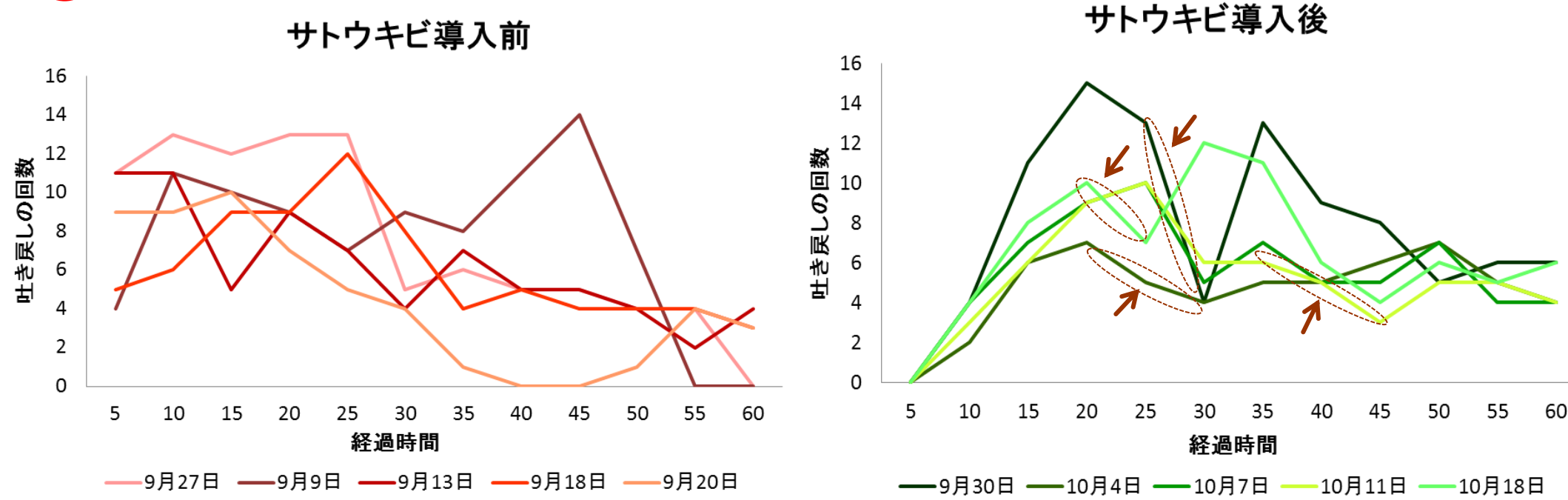
結果

観察1 昼食最後の食べ物を手にしてから最初の吐き戻しをするまでの時間はサトウキビ導入後の方が長かったが、1時間あたりの吐き戻しの回数と時間は変わらなかった。

● 表. 最初の吐き戻しまでの時間、1時間あたりの吐き戻しの回数および吐き戻しの時間。

	サトウキビ導入前	サトウキビ導入後	p値
最初の吐き戻しまでの時間（分）	1.4±0.2	7.0±1.1	0.00092
1時間あたりの吐き戻しの回数（回）	76.2±15.5	71.6±15.1	ns
1時間あたりの吐き戻しの時間（分）	34.2±3.3	32.0±3.8	ns

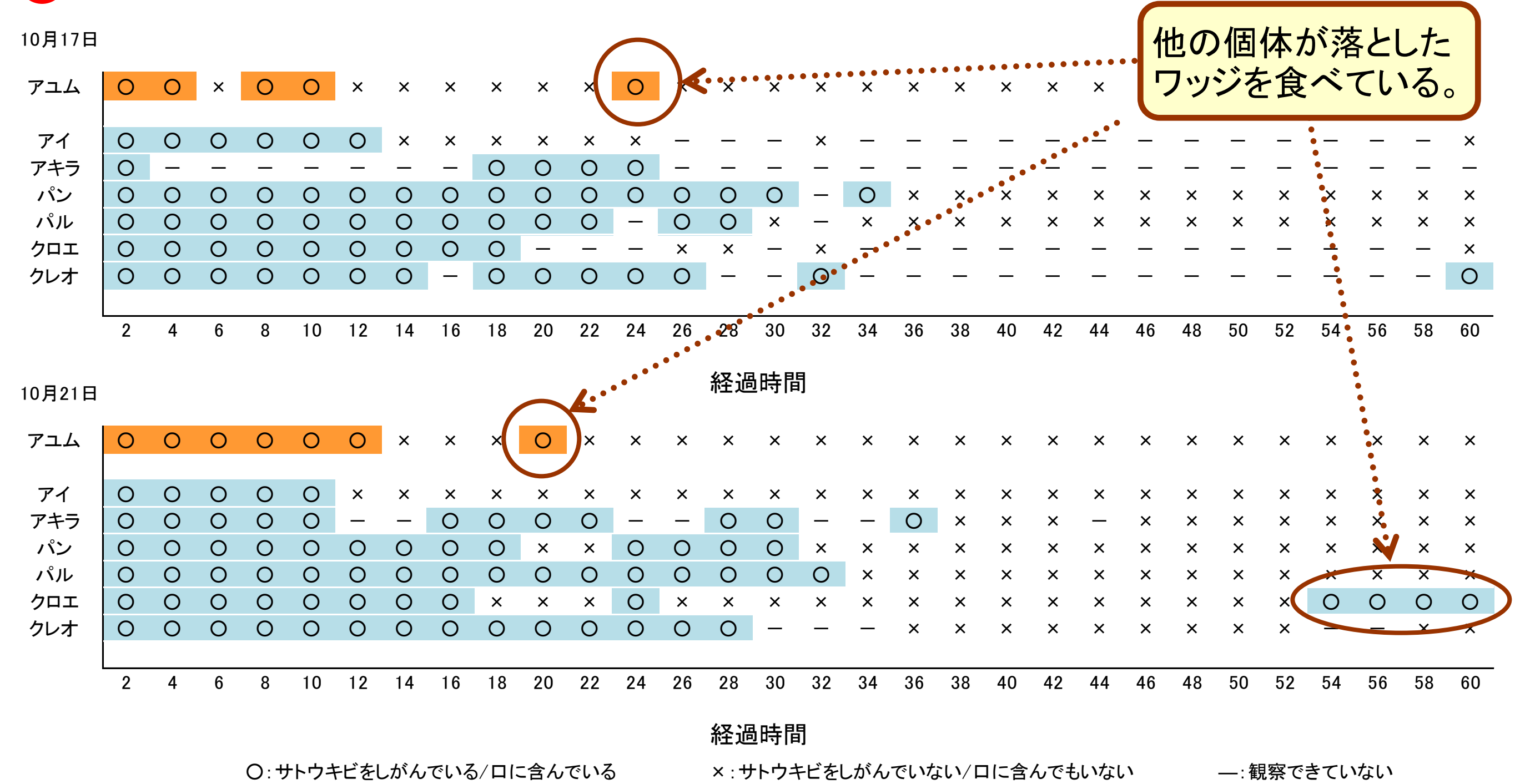
● グラフ1. 1時間あたりの吐き戻しの時間



アコムは自分の分を食べ、しばらく吐き戻しをしたあとに、他の個体が出したワッジを食べることが多い（図中→○）

観察2 アコムとアコムの母親アイは10分程と比較的短い、中には30分近くしがんでいる個体もいた。また、一度食べ終わっても他の個体が落としたワッジを拾い、しばらくしがむ個体もいた。

● グラフ2. 1時間あたりのサトウキビの採食時間。



考察

サトウキビ導入は、昼食最後の食べ物を手にしてから吐き戻しを始めるまでの時間を延ばす効果がある。しかしアコムの場合、長時間しがんでいることができないため、その効果は数分程度にとどまってしまう。その上、糖分が豊富でありアコムの嗜好性が強いため、1時間あたりの吐き戻しの頻度に変化が見られなかったと考えられる。また、アコムは自分の分を食べたあとに他の個体が出したワッジをよく食べる。しかし、最近では他の個体のサトウキビの採食時間が長くなっており、なかなかワッジを出さないため、アコムの採食機会が少なくなる日もある。群れの中には採食回数を重ねるごとに採食時間が長くなり、最近では30分近くしがんでいる個体もいるため、今後アコムも食べ方が上達する可能性が考えられる。また、群れ内の女性の性皮が腫脹する日はアコムはその個体を追うようになるため、ワッジを探さなくなり、吐き戻しが多くなる日もあった。このように群れ内の個体との関係性も影響していると考えられる。これについては今後調査をおこないたいと考えている。一方で、繊維質の多い木の枝や草との併用も今後検討する予定である。

謝辞

人類進化モデル研究センターならびに思考言語分野の皆様にご多大のお世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。本研究は科学研究費特別推進研究#24000001の支援を受けています。